

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18168

研究課題名（和文）指導言語の発話を担う体育教師の身体に関する現象学

研究課題名（英文）Phenomenology of the PE teacher's lived body generating their speech of teaching language

研究代表者

坂本 拓弥（Sakamoto, Takuya）

筑波大学・体育系・助教

研究者番号：30734298

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、体育教師の指導言語が児童・生徒に届くとは如何なる事象であるのかを明らかにすることであった。研究の結果、この事象の成否が体育教師の身体の在り方に左右されていることが明らかになった。なぜなら、メルロ＝ポンティの言語論から導き出されたように、体育教師の発話は身体的な所作であり、それは1つの能力として成立しているからである。このことから、同じ指導言語が、なぜ教師が異なると伝わったり伝わらなかつたりするのかという、実践的問いの答えも、同時に明らかになったと言える。より具体的には、体育教師の指導言語の発話は、身体のレベルにおいて、児童・生徒に「ふれる」という在り方をしているのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、体育授業における指導言語の研究において、指導言語の発話とそれを支える体育教師の身体に着目することの必要性を示した点にある。これは、これまで多く蓄積されてきた指導言語研究の成果、すなわち指導言語の辞書的な分類とともに、現実の授業において個々の指導言語がどのようにして生まれるのかという点に注目する必要性を示すものである。また、このことは教育現場における意義にも直接的につながっている。具体的な体育授業において、教師は自らの用いる指導言語を検討するとともに、同じ比重で、自らの身体的な在り方を自覚的に省みる必要がある。このことは、教員養成の段階においても重要な課題になると言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to examine and show how the teaching language used in PE classes reaches students. As a result, this examination has made it clear that the bodily ability of individual PE teachers is one of the reasons why the same teaching language does not come through regularly. This insight could be derived from the Merleau-Ponty's language theory. According to his theory, speech is not representation, replacing results from inner thought with semiotic language, but a bodily gesture. The speech, in his argument, is an expression of individual bodily ability and bears a sense in itself. Therefore, at bodily level, the speech of teaching language is "touching" students. This expression, "touching," should not be understood as a simply figurative one, but rather as how the speech as bodily gesture reaches students directly.

研究分野：体育・スポーツ哲学

キーワード：指導言語 体育教師 発話 身体 体育授業 メルロ＝ポンティ 記号 間身体性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、大きく次の2つの問いがあった。1つは、次の実践的な問いである。すなわち、なぜ同じ指導言語を用いてもその伝わり方に違いが現れるのか、という問いである。ここで想定される状況には、例えば、ある体育教師ともう1人の別の体育教師が、それぞれ同じ指導言語を用いて授業を行ったにもかかわらず、まったく異なる指導の結果が現れた場合などが挙げられる。もちろん、このような状況設定については、ひとが異なるのだから結果が異なって当然ではないか、という反論が予想される。しかし、そこで当然と見なされていることこそ、本稿が解明したい事象そのものである。つまり、体育授業において教師が異なると指導言語の伝わり方も異なりうるのはなぜなのか、という問いに、本研究は哲学、特にメルロ＝ポンティの言語論に基づく視点から1つの回答を試みたいと考えた。

また、この試みは、上記の実践的な問いに加えて、体育学における先行研究とも問題意識を共有している。例えば、指導言語に限らず、同じ指導方法や教材等を用いても、全く異なる結果が現れることについては、非言語的な問題として、これまでも「潜在的メッセージ」(シーデントップ、1988、p.147)等の影響が指摘されてきた。実際、シーデントップ(1988、p.147:一部改訳<p.111>)は体育授業におけるその重要性について、体育教師の「行う一切のことから『潜在的メッセージ』が発せられていることを十分意識しておかなければならない」と指摘している。なぜなら、それが指導言語の内容よりも児童・生徒の学びに強い影響を与える可能性があるからである。しかし、その詳細については、十分な検討がなされてきたとは言えない。したがって、本研究の試みは、これまでその存在と影響が指摘されながらも十分に解明されてこなかった事象に、新たな角度から光を当てることになると考えられた。それは同時に、従来の指導言語に関する研究成果の意義と限界を、より適切に際立たせることにもなると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、体育教師が授業場面で発する指導言語について、特にその発話という実践的行為を現象学的視点から捉えなおすことによって、その行為を支える体育教師の身体の内方を明らかにすることである。この試みは、従来の指導言語研究に不足していた発話という身体的行為に光を当て、さらには、その行為を支えている体育教師の身体の内方の重要性を明らかにするものである。これによって、体育教師の指導言語研究に新たな研究対象が示され、その結果として体育の教員養成や教師教育において教師の身体を育む必要性が明らかになるであろう。

3. 研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究は次の手順で検討を進めていった。まず、これまで体育授業における指導言語がどのように論じられてきたのかを確認し、そこで前提とされている言語観を明確にした。次に、その言語観について、主に言語に関する哲学的議論に基づいて批判的な検討を試みた。特に、先行研究が採用してきた研究方法において、暗黙の前提とされてきた言語観の課題を浮き彫りにした。そして、その課題を克服しうる視点として、メルロ＝ポンティの言語論に着目した。その視点によって、言語と身体との関係を描き出し、われわれの発話が他者に「ふれる」という在り方を示していった。このことを踏まえ、最終的に、体育教師の発する指導言語が児童・生徒に伝わるという事象を明らかにしていった。

4. 研究成果

これまでの体育授業における指導言語に関する研究では、主に、実証科学的な授業分析の方法が採られてきた。そこでは、体育教師の発した1つ1つの指導言語が、肯定的や否定的といった様々なカテゴリに分類され、それらカテゴリ別の発現数及び割合と、児童・生徒による授業評価との相関関係が問われてきた。また、最近の研究動向においても、このカテゴリをさらに細分化していく傾向が見られた。これらのことが示すように、従来の諸研究は、体育教師の発した指導言語を細分化し、量的に捉え、統計的手法によって分析してきたのである。そしてここに、実証科学的方法が指導言語について有する記号的言語観を指摘することができる。つまり、そこで指導言語は、数値化された記号と見なされているのである。

しかし、そのような諸研究の最大限の評価とともに、われわれはその課題を適切に把握しておくべきである。特に、昨今様々な領域について指摘されるように、実証科学的方法によって測定可能な量的データのみを重視する傾向は、その裏側で、当該の方法によっては捉えきれない事象の存在を見ていないという指摘もなされていた。したがって重要なことは、従来の指導言語研究に潜在していた記号的言語観自体を、批判的に捉え直すことなのである。

ある語とその意味を一对一で対応させる記号的言語観については、哲学的言語論をはじめとして、すでにいくつかの問題点が指摘されている(飯野2007)。その指摘を省みるならば、従来の指導言語研究の課題が浮き彫りになる。すなわちそれは、従来の諸研究が言語行為と言語とを明確に分けることをせずに議論を進めてきたという課題である。この課題は、従来の指導言語研究が体育教師の指導言語のある側面を捉え損ねてきたことを意味する。つまり、これまでの指導言語研究は、指導「言語の研究」だったのであり、そこには、体育教師が指導「言語を発話するという行為」への着目が欠けていたのである。それゆえ、この言語行為と言語との区別に基づいて、記号的言語観によっては捉えることのできなかつた事象の検討を進める必要があった。

このような発話と言語との区別については、例えばソシュールによってパロールとラング

の区別として論じられ、その理論は広く参照されている。そして、ソシュールがラングの体系の探求に向かったのに対して、あくまでもパロールの意義を強調する議論を展開したのが、メルロ＝ポンティであった。本研究が、体育教師による指導言語がどのように児童・生徒に伝わるのかを解明するためには、このパロールに着目することが必要であり、したがって、パロール＝発話に特化したメルロ＝ポンティの言語論は、本研究の考察に不可欠の視点になると考えられた。

検討の結果、メルロ＝ポンティの言語論は、体育教師の指導言語の捉え直しにおいて、少なくとも次の2つの点において示唆的であることが明らかとなった。第1に、従来の記号的言語観を批判的に乗り越えたところにその言語論が展開されており、その意味で、本研究のねらいとその方向性を一にしている。また第2に、言語の発話＝パロールを身体的所作として捉えることによって、それが個々の人間の身体的な能力に担われていることを示している。このことは、指導言語の発話を、体育教師の身体にかかわる事象として探究する可能性を示唆する。指導言語を個々の体育教師が発するという事象が、記号的言語観を背景にもつ今日の指導言語研究に欠けていた論点であったことを省みるならば、メルロ＝ポンティの言語論とともに、体育教師による指導言語の発話を身体的な能力の現れとして捉えていくことは、指導言語についての新たな視界を拓きうるものと考えられた。

このメルロ＝ポンティの言語論に基づくことによって、本研究のはじめに提起された問い、すなわち、体育授業において指導言語が児童・生徒に伝わるとは如何なる事象であるのか、という問いに対する回答は、以下のように示された。それは、体育教師の指導言語の発話が、児童・生徒に「ふれる」ことに支えられた事象である。

指導言語の発話は、体育教師の身体的所作であり、それは個々の身体的な能力の現れである。そして、この事象は、体育教師と児童・生徒が、ともに或る「姿勢」で生きている、根源的な間身体性のレヴェルを場として成立している。これが、本研究の結論である。

この結論から、本研究のはじめに挙げたもう1つの問い、すなわち、なぜ同じ指導言語が伝わらないのかという問いに対しても、1つの答えを提示することができる。本研究の検討から導かれたように、指導言語の伝わり方の違いは、指導言語の発話を担う個々の体育教師の身体的な能力の違いに依っている。この後者の違いによって、指導言語の発話が「ふれる」という事象の成立の可否が左右され、さらには、その事象の内実の多様性が担保されている。付言すれば、個々の体育教師の身体に基づくその多様性が、彼/彼女らの1つの個性を形成しているとも言える。いずれにしても、間身体性という場において、体育教師の指導言語の発話は児童・生徒に「ふれる」ことができ、それを基礎とすることによって、はじめて指導言語の記号的な意味を伝えることができるのである。同じ指導言語が必ずしも伝わらない1つの理由は、このように理解される。

最後に、以上の議論が、従来の指導言語に関する諸研究とどのような関係にあるのかを示しておきたい。それは、主に次の2点において、相補的な関係を築きうるものである。まず、これまで潜在的メッセージや非言語的な事象として言及され、実証科学的方法によっては捉えることの難しかった対象について、本稿は身体的所作としての発話という新たな捉え方を提示した。このことは、言語的と非言語的という安易な二分法を回避し、体育授業における指導言語の在り方をより現実的に即して理解する可能性を有している。特に、体育教師の身体的な能力とその在り方という対象は、これまでの指導言語研究においては論究されてこなかった新たな論点である。このような可能性は、メルロ＝ポンティの言語論から導かれたものであり、その意味において、体育学における体育科教育学と体育哲学との相補的な関係を示唆するものであると言える。これが、1つ目の相補性である。

2つ目の相補性は、指導言語の発話が新たな指導言語を生み出す可能性における循環的な関係である。本研究で指摘したように、実証科学的方法によって様々に分類された多くの指導言語は、体育の授業実践において、豊富な選択肢としての意義を有している。しかし、それらはあくまでも体育の授業実践に際しての参照軸であり、絶対的な規範ではない。つまり、いつでもどこでも誰にでも通用する指導言語はないのである。本研究の議論に依れば、指導言語に対するそのような理解「記号的言語観」は、その根源にある指導言語の発話を見落としているのである。つまり、根源的な間身体性のレヴェルにおいて成立する指導言語発話は、まさにそれが生き生きと児童・生徒に「ふれる」ことができるがゆえに、つねに、体育教師が事前に想定していた以上のことを生み出しうる。そして、それこそが、実証科学的に捉えられる指導言語のリストを豊かにしうるのである。だからこそ、われわれが体育教師による指導言語の発話と、そこから生み出される指導言語の充実を目指すためには、そこにおける循環的な相補性を改めて重視しなければならないのである。これが、本稿の議論が示す2つ目の相補性である。

主参考文献

- 飯野勝己(2007)言語行為と発話解釈：コミュニケーションの哲学に向けて．勁草書房．
メルロ＝ポンティ：竹内芳郎・小木貞孝訳(1967)知覚の現象学1．みすず書房．< Merleau-Ponty, M. (1945/2005) Phénoménologie de la perception. Gallimard, Tel n°4 >
坂部恵(1983)「ふれる」ことの哲学：人称的世界とその根底．岩波書店．
シーデントップ：高橋健夫ほか訳(1988)体育の教授技術．大修館書店．< Siedentop, D. (1983) Developing teaching skills in physical education (2nd ed.). Mayfield Publishing Company. >

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 坂本拓弥	4. 巻 65
2. 論文標題 体育教師の指導言語が児童・生徒に ふれる ことについての哲学的試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 171-186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5432/jjpehss.19092	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂本拓弥	4. 巻 67(10)
2. 論文標題 メルロ=ポンティの身体論に基づく体育教師のありさま	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 701-705
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Sakamoto Takuya
2. 発表標題 A philosophical inquiry into instructional language "touching" students in PE classes
3. 学会等名 2019 Taiwan International Conference of Philosophy of Sport (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sakamoto Takuya
2. 発表標題 Verbal Expression of Sport Coaches and its Existential Bodily Meaning
3. 学会等名 46th conference of International Association for the Philosophy of Sport (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----